



ヨツバカワリギンチャク

学名 *Isactinernus quadrilobatus*

特徴 和歌山から三重にかけての熊野灘、長崎の五島列島、薩摩川内市の甌島、沖縄南方沖のほか、南太平洋の水深110～700mでわずかに確認されている深海性のイソギンチャク。五島列島付近の水深200mで取れた標本を基に、1918年に新種として記載された。和名が提唱されたのはその後80年以上もたった2001年。口は体の上部中央にあり、その縁に数多くの触手がある。イソギンチャクでは普通、触手の生えた部分が円形だが、名前の通り4枚に分かれているのが大きな特徴。縮むと高さ3～4割ほど、伸びると倍以上になる。

えさを捕る時、花開く

タカエビや薩摩甘エビとも呼ばれ人気が高いヒゲナガエビは、深海底引き網漁で取ります。この漁では、思いもよらない貴重な生き物が取れることがあります。

薩摩川内市の漁師さんは、そんな生き物を見つける名人です。その日も「変なのが入ったよ」と連絡をくれました。慌てて向かうと、白く丸まった生き物がかごに浮いていま

した。イソギンチャクのようなですが、獲物を捕まえる触手は縮んで、裂け目が入っています。岩に張り付く部分を見るとイソギンチャクに間違いないありません。「見たことのないイソギンチャクかも」と大喜びで持ち帰りました。

水槽に入れてしばらくすると徐々に体が伸びて、4枚の花びらを広げたような姿になりました。特徴的な姿なのに、図鑑では見つかりません。研究者からの情報でようやく、「ヨツバカワリギンチャク」と分かりました。まさしく名は体を表しています。残念ながら、そのイソギンチャクは数日で死んでしまいましたが、その後、漁師さんが何度も取ってくれて、研究者を驚かせました。

後に取れたものは状態も良く、体が伸びても四つ葉が開きません。普段は、触手を縮めて閉じているのかも知れません。えさを与えようと少し触手に触れると、パツと大きく四つ葉が広がりました。暗く冷たい深海で獲物を捕らえようと花開く姿を想像し、少しぞくっとしました。(展示課 学習交流係 長・出羽尚子)

おもしろ生き物図鑑

かこしま水族館から